


# 六花

4

俳句雑誌りつか  
2012 (平成24年)  
Cover Dress of Little Bird



# 山田六甲

琴

うめ

ま 真先に鉢の紅梅開きけり  
つ 爪先でさぐりつつゆく梅の闇  
の 野の端に野梅の青くありにけり  
こ こぼれ梅走根に猫諸手つき  
と 鳥肌を立て断崖の梅覗く  
は 浜風に砂の匂へる梅見かな  
ま まるまりて犬は薄目を梅の下  
つ 土入りし爪を切りをり梅活けて  
に 西へ漕ぐ小舟に梅の日暮れけり

な 懐しむ為の白梅見当てけり  
ら らふそくの一灯に梅なごみけり  
へ へし折られぬたる紅梅咲きにけり  
た 竹の穂に梅半月のかかりけり  
け 喧噪の街へ梅からもどりけり  
の のんびりとするには寂し梅日和  
こ 小刻みに湖の波寄せ枝垂梅  
と 左見右見して紅梅を発てる鳥  
は 春雨に包まれながら梅ひらく

た 樽酒を振舞れけり梅見茶屋  
け 結界の石にひとひらこぼれ梅  
に 庭先に白梅の闇待ちみたる  
な 名付けたる人は知らざり臥竜梅  
ら ランドセル投げ出し梅に体当たり  
へ へたくそな短冊梅にかけてあり  
と 年寄れば杖に素直ぞ梅の山  
し しら梅に残月の反り鋭かり  
の のたうてる走根に梅こぼれけり

# 玉砂利へ初日の潮満ち来たる

笹村 政子

たまじやりへはつひのうしおみちきたる ささむらまさこ

少年に鳩帰り来し初御空

いくすぢの光の流れ枯柳

寒鯉や撫づるともなく泥撫でて

寒禽の影は地面へ届かざる

明け方の初詣。境内の玉砂利へ初日が差してきた。光が徐々に玉砂利を進んでくる。潮が満ちてくるようではないか。やがて玉砂利は広々と明るい海になってくる。今年の幸先の良さを示唆してくれるようで感動した。だから「満ち来たる」なのだ。正月でも俳人の眼はお休みではなかった。玉砂利をじわじわと進んでくる初日の光を「初日の潮」と言った。それを聞いて「うしおではない光だろう嘘つき」とは誰も思わない。それが韻文の力。散文だったら「潮のように」だけけれど「ごとく俳句」には驚くような意外性が必要。俳句は大嘘を言い切ることだ。

# 雉子鳴いて父のみさうな畑かな 市川伊團次

きじないてちちのいそうなはたけかな いちかわいだんじ

玄関の菜の花朝の日を浴びぬ

木の芽晴仮病膨らむ屋根の下

紅梅とたはむれてゐる妻の留守

紅梅の紅き匂ひを盗みをり

雉子が鳴いて、ふと農作業をしている父がそこに居そうな心配がした。父の記憶を蘇らせた雉子の声。雉子はいざというとき果敢に天敵に立ち向かう。「雉も鳴かざば撃たれまい」「雉も鳴かざば射たれまい」とも）は余計なことを言ったばかりに、自ら災いを招くことわざ、慣用。だが真実は子を護るため敵の目を親に向けさせ、犠牲になったのだ。父は雉子のように、家族を護るため必死で働き、楯になってくれた。火の粉を被ってくれた。今は自らが家族を護る親雉子の立場。掲句のように切なくほのぼのとした作品が伊團次の真骨頂。

# 大空へ犬放たれる芝青む

田尻 勝子

おおぞらへいぬはなたれるしばあおむ たじりかつこ

きつちりと革手袋の置かれをり

やはり神在ると思ひぬ今朝の春

寒鴉三声で朝を裂きにけり

青首の大根提げてゆきにけり

「大空へ犬放たれる」という表現に驚く。犬が芝生へ放たれたと言われても「ああそうですか」としか言えない。事實は青み始めた芝に犬が放たれたのであつても。事實を述べただけではただの報告句。嬉々として駆け回る犬の動きを「大空へ犬放たれる」と言い切つた。もちろん放り投げられた犬が空を飛ぶはずはないけれど、そんなイメージを前に押し出した表現。表現というより俳句を爆発させた「3D俳句」。

これを俳句的にまとめたのでは実感や感動がしばむ。纏まらないのが勝子俳句の魅力であり、誰にも真似のできない（真似したくない？）魅力。

大あくび

貝森光洋

大晦日日本一の大あくび  
鏡割りあの手この手で攻めてみる  
しばれたる顔をしばらく解しおり  
鮫鱈の貌の隅々まで哀感  
梟の目玉の中に夜潜む

流 木

梶浦玲良子

小春日や帯と流るる坂の町  
鐘ひとつ村をはなれず冬茜  
みそさざい農婦夕映え羽織りけり  
流木にいのちのかたち寒すばる  
翌檜に星ふるかぎり筵織る



梅 林  
佐津のぼる

梅林や押し手の代る車椅子  
梅林に来て一団の散らばれる  
梅林のいただき街をみはるかす  
休耕の田のひろがり野梅咲く  
会葬の列梅枝の下通る

クリスマス  
松本文一郎

色変へず摂理に背く银杏あり  
朝霜や生氣漲るのらぼう菜  
長き柄の振舞酒や三の酉  
みちのくの入口暗し雪囲  
妻よりの三年日記クリスマス

せつじゆしゆう  
雪樹集

初日の出

永田万年青

初日の出嶺と雲間にありにけり  
初日の出子の目大きくなりにけり  
追焚きの釘を押して出る初湯  
町並を鮮やかにして寒の入り  
七草の粥に入りたる小餅かな

寒雀

蟻

蜂

寒雀鳩の獲物をうばひけり  
ブレーキの音こだまして冬木立  
ドア寒し対向電車待ち合はせ  
風立ちてすれちがひける寒の水  
ビル街のすき間の山に雪積もる

# 蛍雪譚 六甲

しばれたる顔をしばらく解しおり

貝森 光洋

寒さで凍えた顔の筋肉をほぐすというのがさすが北国と  
思う。外から部屋に入ってすぐには表情を作れない。従っ  
て笑うことも怒ることも無表情。おまけに口もしばれてい  
るからものを言うことさえままならない。東北の人が口を  
ほとんど開かなくても喋られる必要に迫られたのはそこ  
だ。自ずと東北弁が生まれ、今日まで引き継がれて、独特  
の言語文化を築いてきた理由がこの作品にうかがえる。比  
較的温暖な地方の我々には「寒い」のではなく「痛い」と  
いう感覚の寒さ。しかし北国の人には関西、特に京都が寒  
いと感じるらしい。底冷えた。日本は狭いようで広い。夢  
風撰候補。

大晦日日本一の大あくび

お正月や大晦日には「日本」という言葉を強く意識でき  
るとき。

北と南の隔てなく大晦日と元日は全国同時にやってくる。大晦日には一年を送り、元日には一年を迎える。日本人の意識がこの時ばかりは統一される日。その上日本一の大きなあくびは元日ではなく、大晦日こそふさわしい日だという。大きなあくびをしてその年に溜まった邪気を吐き出す日でもある。今年から「大あくびの日」を制定して、紅白歌合戦の一分前に舞台上に閣僚が大切りよろしく紋付き袴で並び立ちイッサーので大あくびして、全国民が一斉に「ワオオーッー」と一分間黙禱よろしく汚れて淀んだ息を吐く日にしよう。